

19 世紀後半～20 世紀前半ロシア「絵入り雑誌」の研究 —『ニーヴァ』と『ロージナ』の脚注訳の差にみる中間教養読者層の中の多層性—

大久保 圭

1. はじめに

絵入り雑誌 (Иллюстрированный журнал) に関するこれまでの先行研究は、レイトブラトが示したような、当時のロシアの社会情勢や出版業界の文脈の中で紹介される¹、あるいは異のように、分厚い雑誌 (Толстый журнал) と絵入り雑誌の比較の観点や、絵入り雑誌から都市中間層の実態を明らかにする目的で研究されてきた²。一方で、多数出版された絵入り雑誌について、同ジャンル内における各誌の比較という点については、まだ研究の余地があるように思われる。レイトブラトは『ロージナ (Родина)』編集責任を務めたカスパリが、分厚い雑誌、絵入り雑誌の先駆けの『ニーヴァ (Нива)』に知識、教養の面で届かない読者を狙って『ロージナ』を作った、という出版の経緯を紹介しているが³、このように絵入り雑誌は、分厚い雑誌や、更にそれに準ずる知識、教養を要する『ニーヴァ』などの絵入り雑誌を読むだけの準備ができていない識字層が求めるレベルの読み物を次々と生み出した結果として、ジャンル全体での商業的成功を得た。絵入り雑誌を牽引した出版人 (『ニーヴァ』のマルクス、『ロージナ』のカスパリ、『アガニョーク (Огонёк)』のゴツベ等) は共通して、このような読者の知識、教養のレベルを“縦”にみる視点を持ち、この差別化によって生まれた各誌の差異を絵入り雑誌の特徴の一つと言ってもよいのではないかと⁴。

しかし、近年で最も絵入り雑誌に関する詳細な研究の一つを発表しているボロンケーヴィチも、『ニーヴァ』と後発の『ロージナ』の違いについて触れてはいるものの、それは掲載記事の違いの明確化にとどまり、「絵入り雑誌」内の読者層の格差から生じる紙面の差異について、具体的な議論をしていない⁵。

そこで本稿では、『ニーヴァ』、『ロージナ』の掲載作品⁶に挿入された外国語につけられた脚注翻訳 (以後、“脚注訳”と呼称) に着目した⁷。“注釈”について、沢田はその定義の一つを「本文に入れると叙述の流れを妨げるが、本文の事項の理解に役立つ補足情報ないしコメント」⁸としている。つまり、出版側は読者に不足している知識を予め想定し、それを補うために注釈を用いるのである。そこで、注釈を調査することで、出版側の想定した読者の知識レベルを明らかにすることができるのではないかと考えた。そして、その最も分かりやすい例として脚注訳に焦点を絞った。そもそも、ロシアの雑誌における脚注訳は、絵入り雑誌によって初めて一般的に導入された可能性が高い。よく知られているように、19 世紀ロシア

の上流社会では外国語が現在のロシアとは比べ物にならないほど身近なものであり、その浸透度はトゥルゲーネフのように家族間でも常時フランス語での会話がなされていたという逸話が残る者もいたほどである。同様に彼らの読み物、寄稿先となる分厚い雑誌にも外国語が多く用いられ、特別な場合⁹を除いて脚注訳は与えられていない。つまり、分厚い雑誌が最もよく読まれた 19 世紀中期～後期のロシアでは識字層の多層化はまだ進行しておらず、都市部識字層の殆どが単一の知識共同体に属しており、出版側は別段意識もせずに、このような外国語が読める読者を前提にした雑誌作りをしていたと想定できる。これに比べ、脚注訳が入った絵入り雑誌には、想定読者の知識、教養を明確に意識し、また読者の求める内容は何かという視点を意識した誌面作りを心掛けようとする出版側の意図が感じられる。『ニーヴァ』、『ロージナ』両誌の脚注訳の特徴を調査し、そこから見える想定読者の違い、そして生じた絵入り雑誌内の格差が、ロシアの読者構造にどのような影響をもたらしたのか、併せて考察したい。

2. 脚注訳分析

2-1. 『ニーヴァ』

『ニーヴァ』の脚注訳の特徴は、ドイツ語、英語等が翻訳されている一方で、フランス語のみ翻訳されていないという点である。以下の引用は、1899 年刊行の『ニーヴァ月刊文学付録 (Ежемесячные литературные приложения к журналу “Нива”)』という、『ニーヴァ』の付録に掲載された二章からなる紀行小説「旅的一幕集 (Дорожные миниатюры)」の一節だが、『ニーヴァ』の脚注訳の特徴が端的に表れている。

直接的な関連性を持たない各章の舞台は、それぞれ、第一章がドイツライン川支流のリゾート地、第二章がイタリアのヴェネツィアである。第一章では、リゾート地に集まった欧州、ロシアの上流階級人達の退屈な日々と、そこに現れた地元の貧しいキイチゴ売りの少女の交流が描かれるが、同地で過ごす人々の服装、生活の様子が以下のように描写される。

引用 1 :

この夏の流行は、明るい色が優勢だった。パステルブルー (bleu-pastel)、オールドピンク (vieux-rose)¹⁰、コーン色 (maïs)、ニース紫 (violet de Nice)、ゼラニウム色 (geranium) などがそれである。

(中略)

子供たちは退屈だった。というのも、老人たちと四六時中一緒にいて、「まっすぐお立ちなさい」(tenez vous droite) だとか、「しかめっ面をしてはいけません」(ne faites pas de grimaces) などという小言を聞かなければならなかったからだ (後略)。¹¹

このように、文中ではフランス語が挿入されているが、これについて脚注訳はつけられていない。

一方で、作品後半に登場する地元の少女がリゾート地に飛び込み、キイチゴを売ろうとする一部始終は以下の通り描かれている。

引用 2：

彼女は、両手にキイチゴを抱えてやってきた。そして、おどおどと慎重に、立ち並ぶ椅子を静かに通り抜け、緊張で少し震えた声で食事をとる人々に訴えた。「上等のキイチゴです、、どうか、買ってください、、、」(Schöne Himbeeren... Nehmen Sie, bitte...《脚注露訳：Прекрасная малина. Купите, пожалуйста... 》)

(中略)

日中の太陽に照りつけられ甘く香るキイチゴを、少女はぐいと突き出した。「何か買って頂けませんか、、、」(Kaufen Sie etwas!... 《脚注露訳：Купите у меня что-нибудь. 》)

(中略)

(筆者注：キイチゴを買ってくれた上に、釣銭を受け取らず、そのまま少女に持たせた貴婦人に対して)「貴女の御親切に、神が祝福せんことを!」(Dank' Euch Gott für Ihre Güte!... 《脚注露訳：Благослави вас Бог за вашу доброту! 》)¹²

少女の会話にはドイツ語が用いられ、その全てに脚注訳がつけられている。続く第二章でも、同様に訳のないフランス語と脚注訳のついたドイツ語が挿入されている。

引用 3：

花は見えない、しかし我々はその香りを感じたのだ! (On ne voit pas les fleurs, mais on sent leur parfum!)

(中略)

「ローラ! ローラ! ロレットにキスをしておくれ!」(Lora! Lora! Kuss Loretto!... 《脚注露訳：Лора, Лора, поцелуй Лоретто! 》)

「ロレット! ロレット! ローラのこと、愛してる?」(Loretto! Loretto! Liebst du Lora? 《脚注露訳：Лоретто, Лоретто, любишь-ли ты Лору? 》)¹³

本作品のみならず『ニーヴァ』では、フランス語とその他の外国語に対し、大部分でこのような対応がとられていることから、この傾向は出版側の方針であったと想定される。『ニーヴァ』本誌、付録に掲載された作品の中から、外国語が挿入されている例を以下に挙げる。

＜フランス語使用例＞

引用 4：「パパ、肉の方がいいよ!」(Papa, de la viande!) / 「でも、ほんのちょっとしかないけどね」(Mais c'est très peu)¹⁴

引用 5：「性別の違いなんて考えたことがなかった、ましてや女の子を意識して見

たことが無かった私にとっては、、私は一瞬にして高揚し、舞い上がり、私は意中の先生に向かって行った。」(Moi qui n'avais jamais pensé à la différence des sexes, ni regardé une fille avec un peu d'attention... je me trouvais enflammé tout d'un coup jusqu'au transport... Je m'avançais vers la maitresse de mon coeur!) ¹⁵

引用 6 : 「従姉よ、私が保証するよ。」(Je vous assure, ma cousine) / 「それは、あまりに優しい慈善作業だ!」(C'est si doux, la charité!..) ¹⁶

引用 7 : 「ねえ、イレーヌさん。気を悪くしないで。」(Voyons, chère Irène. Ne m'en veuillez pas.) / 「あることを思いついたんだ。あらあら、何かって、、あること、としか言わないよ」(j'ai imagine un truc. Ho-la-la! Mais un truc... je ne vous dis que ça.) ¹⁷

<フランス語以外の外国語使用例>

<ドイツ語>

引用 8 : 「そう、それこそが、プードルに秘められたものだ!」(Das also war des Pudels Kern! ≪脚注露訳: Так вот что в пуделе таилось! ≫) ¹⁸

<英語>

引用 9 : 「我らが救いの主イエス・キリスト、御身の名を褒め称える!」(Blessed be the name of Iesus Christ our Saviour! ≪雑誌訳注: Благословен Иисус Христос наш Спаситель ≫) / 「よう旦那、調子はどうだい!」(Halloh Cap!¹⁹! How do you do! ≪脚注露訳: Капитан, как вы поживаете! ≫) ²⁰

<ラテン語>

引用 10 :

「ウオッカを少しばかり買ってくれよ!」(Merce mihi aquam vitae! ≪脚注露訳: Купи мне водки! ≫)

「どのぐらい欲しいんだ?」(Quantum? ≪脚注露訳: Сколько? ≫)

「四分の一ヴェドローだ!」(Quartam! ≪脚注露訳: Четверть! ≫) ²¹

『ニーヴァ』は絵入り雑誌の先駆けとなった存在であり、分厚い雑誌に最も近い雑誌だった。出版側は、読者に一定水準の教養を期待し、そのためロシア人に最も親しみのある外国語だったフランス語は、平易な内容であれば翻訳されなかったということが考えられる。

『ニーヴァ』のこの外国語に対する方針は、発刊当初からしばらくの間は続いていた²²。第一次世界大戦期になると、『ニーヴァ』でも戦時色の強い記事が大半を占め、戦時下の他国の様子などが紹介されるようになる。〈表 1〉、〈表 2〉は、1914 年第 44 号の『ニーヴァ』

で紹介された、英国の対独プロパガンダポスター〈表 1〉と、ベルギーのブリュッセル市に同市長名義で張られた、侵攻してきたドイツの布告に対する抗議ポスター〈表 2〉だが、この二つのポスター下部には、それぞれロシア語の翻訳がつけられている。

〈表 1〉



На ангайской торговой корреспонденции напечатаны теперь эта «немецкая» марка со следующими текстами: Когда на каком-нибудь товаре вы увидите слова: «сделано в Германии», не забудьте, что было «сделано Германией» в 1914 году. Покупайте английские товары!

〈表 2〉



さらに一次大戦後の『ニーヴァ』では、以下のように、一般的な記事に挿入されたフランス語に対しても、他の外国語同様に翻訳がつけられる例もみられるようになる。

引用 11：

「おお、自由よ、お前のためにどれほどの罪がなされてきたことだろう！」
(O, Liberté, que de crimes commis en ton nom! ≪脚注露訳：O, свобода, сколько преступлений свершается ради тебя!≫) / 「お行きなさい!あなたには、私が死ぬのをみる勇氣はないでしょうから。」(Passez! Vous n'aurez pas le courage de me voir mourir ≪脚注露訳：Идите первый! У вас не хватит мужества видеть, как я умираю.≫) ²³

ロシア革命前夜、高い教養を有した貴族階級は次第に没落し、更に 19 世紀末から続くロシア語、ロシア文学を重視した教育啓蒙活動の成果や大戦期のロシア国民意識の高揚なども影響したことなどから、以前は母国語に準ずる位置を与えられていたフランス語が、その特権性を失い、徐々にその他の外国語と同様に扱われるようになったことが考えられる。

2-2 『ロージナ』

『ロージナ』では、例外なくあらゆる外国語に脚注訳がつけられている²⁴。以下の引用は、『ニーヴァ』の項で紹介したフランス語と比較しても平易な内容だが、このようなフランス語にも脚注訳がつけられている。

引用 12：

「パブリクは？ (Et Paul? ≪脚注露訳：А Павлик? ≫)」

「彼は、今日は遠慮したいという事でして、いや、昼食の席につけるような体調じゃないのですよ。 (Il fait ses excuses, madame, mais il n'est pas en état de dîner a table. ≪脚注露訳：Он просит извинить его, но он не в состоянии обедать за столом. ≫)」

「病気の？ (Il se porte mal? ≪脚注露訳：Он заболел? ≫)」

「あ、そういうことではないんですが、、、ちょっと頭が痛いとかでした。いずれにせよ、すぐに良くなりますよ。 (Oh, non, madame… Un tout petit mal de tête; enfin ça va passer tout à l'heure. ≪脚注露訳：О, нет… немного болит голова. Во всяком случае, это скоро пройдет. ≫)」

「でも、そしたら、、 (Mais, alors… ≪脚注露訳：Но, тогда… ≫)」

(中略)

「彼は横になっているの？ (Est-il couché? ≪脚注露訳：Он лежит? ≫)」

「ええ、マダム。 (Oui, madame. ≪脚注露訳：Да, сударыня. ≫)」²⁵

既に紹介したとおり、『ロージナ』編集長カスパリの方針は、『ニーヴァ』に手の届かない読者のための雑誌作りだった。そのため、教養の面で一段劣る読者のために、フランス語にも翻訳をつける必要があったのだと考えられる。『ニーヴァ』と同様に、掲載された作品に挿入された外国語使用例を以下に挙げる。

＜フランス語＞

引用 13：「サルデーニャ王の従兄へ」 Au cousin du roi de Sardaigne ≪脚注露訳：Двоюродному брату сардинского короля. ≫²⁵

引用 14：「ものにはタイミングというものがある！」 Chaque chose à son temps! ≪脚注露訳：Все в свое время. ≫²⁶

引用 15：「いつも i の字の点を打つことなんてできないよ！」 (on ne peut pas mettre toujours les points sur les i! ≪脚注露訳：нельзя-же всегда ставить точки над i ≫)²⁸

引用 16：「ああ、なんて連中だ！」 (Quels types, mon Dieu! ≪脚注露訳：Боже мой, какие типы! ≫)²⁹

引用 17：「レノーさん、そんなに熱くならず、急いじゃいけませんって！」 (Pas trop zèle et pas si vite, m-iieur Reno! ≪脚注露訳：Не слишком усердствуйте и не

торопитесь, господин Рено. ») ³⁰

<ドイツ語>

引用 18：彼がフリードリヒシュトラッセ通りに行きつき、そこからウンター・デ・リンデン通り（Unter den Linden ≪脚注露訳：Унтер ден линден≫）へ抜け出したのは、まだ十分に早い時間のことであった。³¹

引用 19：彼女は黙ってリガ時評（Rigasche Rundschau ≪脚注露訳：<Рижское обозрение≫）を広げると、静かな落ち着いた声で読み始めた。/ まだ貴族学校（Ritterschule ≪脚注露訳：Дворянская школа≫）の生徒だったころから、彼は彼女に惚れており、そして今では自分の出世を犠牲にし、自身の名家の伝統に反しているのだ。³²

<イタリア語・ラテン語>

引用 20：「ガリア人は追い立てられた後、散り散りに自分たちの住処へ走り去っていった。」（Galli, postquam pellebantur, in vicos suos diffugerunt. ≪脚注露訳：После того как галлов стали гнать, они разбежались по своим деревням.≫）³³

引用 21：「過去とはさよならだ。」（Addio del passato. ≪脚注露訳：Прощай прошедшее.≫）³⁴

引用 22：「皇帝陛下万歳! 死にゆく者たちより敬意を捧げましょう。」（Ave, Caesar, morituri te salutant ≪脚注露訳：Здравствуй, Цезарь! Обреченные на смерть приветствуют тебя!≫）³⁵

3. 検証結果

3-1. 多層の中にある多層

メレシコフスキーは、「現代ロシア文学の衰退の原因と新しい潮流について（О причинах упадка и о новых течениях современной русской литературы）」（1892 年）の中で、絵入り雑誌優勢の出版界を憂い、文学の大衆化と商品化に否定的な見方を示している。しかし、『ニーヴァ』が比較的高い教養を読者に要求する雑誌であったということは、本稿で論じてきた通りである。そして、一定の基礎知識が求められるのは、もちろん外国語に限ったことではなく、自然科学や国際情勢に関する記事についても同様だったと推測される。このように考えると、当時のロシア人にとって、『ニーヴァ』の読者であるということは、特に新識字層にとって一つのステータスであったと想像することもできる。また、『ニーヴァ』の誕生により、元々は緩やかな大きな集団であった読者中間層の内部には、一部の上位層で形成された新たな読者層

が出来上がった。そして、『ニーヴァ』の後に続いた数多の絵入り雑誌も、同様にそれぞれ独自の読者層を作り出し、次々と商業的成功をおさめた。このようにして中間教養読者は、再編成を繰り返し、更なる多層化した読者層を形成したのではないだろうか。多層化することの良し悪しは、容易に判断できるものではない。例えば、異の指摘したような³⁶元々の階層区分をこえた旧来の教養ある読者と新しい読者の融合が見られた要因は、『ニーヴァ』が分厚い雑誌に匹敵する教養の高さを誇る独自の読者層を形成したため、という可能性は十分に考えられる。しかし一方で、中下位層の絵入り雑誌読者と、その幾層も上に位置する『ニーヴァ』読者を含む教養ある読者層の、それぞれ形成する知識共同体が、全くの別次元のものとなり、このことがロシア社会全体の知識格差を強固なものにする一因になったという事も否定できないのではないか。新たに浮かび上がったこれらの問題については、読者多層化の功罪と併せて引き続き議論すべきであろう。

3-2. 絵入り雑誌に挿入された外国語

両誌に共通した疑問である、なぜ翻訳をつけてまで外国語を用いたのかという点について、ここまでの調査によって導き出された三つの仮説を提示したい。

第一に、絵入り雑誌が分厚い雑誌を参考にして作られ、その下に連なる雑誌であったということ。西欧の後塵を拝する一方で、急速にその知識を吸収していった19世紀中期のロシアで流行した分厚い雑誌には、外国語が頻繁に用いられ、それを読み、議論することが当時の知識人の必須条件だった。絵入り雑誌は、そのような分厚い雑誌の傾向に少なからず影響を受けていたのではないだろうか。

第二に、絵入り雑誌の読者達が、外国語及びロシアの上流階層への憧れを持っており、それを踏まえた出版側が、意図して外国語が使われる場面を作家に要求したという可能性。小説で外国語が使われる場面は、外国人同士、あるいはロシア人と外国人の会話の他に、上流階級のロシア人同士の会話などにも用いられる。これら全ての使用例に共通して言えるのは、どちらも中流層の多い読者にとって非現実的な世界であるということである。当時の読者は、自分とはかけ離れた憧れの世界を、物語を通して想像していたのではないだろうか。

第三に、絵入り雑誌に書き下ろしていた作家達の中に、率先して作品中に外国語を挿入していた作家がいたという可能性がある。今回引用した作品の一つ（引用7）を書いたВ. Я. スヴェトロフは、他にも『ニーヴァ月刊文学付録』に別の作品を残しており³⁷、やはり登場人物の会話の中にはフランス語が挿入されている。また、『ロージナ』の脚注訳で紹介した引用16の作者名はВал. Я. スヴェトロフであり、彼等は同一人物である可能性が高く³⁸、その場合スヴェトロフは、『ニーヴァ』、『ロージナ』二誌にまたがり、作中でフランス語を使い続けたことになる。このように、作家の中にはすでに流行として失われつつあった外国語を挿入するスタイルを頑なに貫いていた者もいて、彼等は絵入り雑誌に活動の場を求め、上述の通り読者もまた、彼等のような作家を歓迎したのではないだろうか。

絵入り雑誌が盛況した20世紀初頭は、シンボリズムの牙城となった『天秤座（Весы）』、

『金羊毛 (Золотое руно)』といった芸術誌が創刊され、ロシア語で書く新しい創作が試みられた時代でもある。それと比較すると、絵入り雑誌の読者層が楽しんでいた読み物は、やはり前時代のロシアを引きずった、あくまで大衆的で新鮮さを欠いた読み物であったと言える。

4. おわりに

本稿の結びとして、今回の研究についての振り返りと、今後の課題を挙げたい。脚注記の調査によって、『ニーヴァ』、『ロージナ』について新たな一面を示すことができたと感じる一方で、40～50年もの間、毎週発売されていた両誌全てに目を通すことができなかった。『ニーヴァ』の分析のなかで、脚注記の傾向が、第一次世界大戦のあたりを契機に変化した可能性を指摘したが、商業的成功を念頭に置いた絵入り雑誌は時代の求めに応じて趣向を凝らし、場合によっては方針転換を余儀なくされる。そのような雑誌に、一面的な性格付けをすること、一義的評価を下すことは難しい。従い、通時的な視点での評価を一層重視した研究をしなければならない。

更に、文献が揃えられず、雑誌全体の傾向まで明らかにできなかった『アガニョーク』など、今回は調査できなかった他の絵入り雑誌の脚注記についても、今後調査できれば、本稿で得られた結果と併せて一層の議論を深められるのではないかと期待する。

また、今回は外国語に焦点を絞ったが、脚注ではロシア語の語句に対しての説明が入ることもある。例えば『ロージナ』では、医学、軍事等の専門用語などに説明が加えられている他にも、マエストロ (маэстро)³⁹、エレベーター (лифт)⁴⁰ といった、現代では日常的に使われているような語句から、当時パリで流行していたメゾン (Дусе、Пакэн)⁴¹ などについても脚注で説明が加えられている。このような語句を洗い出すことにより、当時の読者の興味、不足した知識などを推し量ることができ、調査の次第では更なる雑誌ごとの性格付けができるはずである。今後の課題としたい。

注

*外国語文献からの引用は全て拙訳による。

1. *Абрам Ильич Рейтблат* От Бовы к Бальмонту. Очерки по истории чтения в России во второй половине XIX века, 2009.
2. 巽由樹子「近世ロシア絵入り雑誌の研究：19世紀後半における都市中間層の文化的側面の分析」東京大学 博士論文、2012年
3. *Абрам Ильич Рейтблат* От Бовы к Бальмонту. Очерки по истории чтения в России во второй половине XIX века, 2009. С.104-105
4. これに対し、分厚い雑誌の出版者たちは、当時は読者の多層化がないこともあるが、形成されたインテリゲンツィア達の主義・思想傾向の数だけ新しい雑誌が誕生していったことから、出版業界を“横”にみる視点を重視していたと推測される。
5. *Андрей Сергеевич Воронкевич* Русский иллюстрированный еженедельник в 1895-1904 гг. 1986
6. 本稿では主に文学作品中心の調査を行ったが、通時的な情報取得のために、作家の伝記やルポなども一部参考になっている。
7. 絵入り雑誌の外国語は、主に脚注部に翻訳されているが、一部は文中の外国語の後ろに括弧書きされたパターンがある。この違いは、通時的な出版方針の変化、翻訳の実行者（出版者、作家）の違い等、様々な理由が考えられるが、本稿ではこの差異については考えず、纏めて脚注訳とみなす。
8. 沢田昭夫『論文の書き方』講談社、1977年、144頁。
9. 分厚い雑誌の脚注訳の有無を調べるにあたり、『祖国雑記 (Отечественные записки)』と『ロシア報知 (Русский вестник)』を調査したところ、外国語に翻訳がつく場合は、外国の専門性の高い分野が紹介されるときなど（例：『ロシア報知』26号「英国の陪審の歴史的な形成の概説 (ОЧЕРК ИСТОРИЧЕСКОГО ОБРАЗОВАНИЯ ПРИСЯЖНЫХ В АНГЛИИ)」）で、小説の場合は、トルストイの『戦争と平和』のように作者が自ら翻訳を行うなどの特別な場合に限られていた。一方で、読者の外国語力の高さが伺える例として、『ロシア報知』42号にて全文フランス語で掲載された「チャーダーエフからシェリングへの2通の手紙 (ДВА ПИСЬМА ЧАДАЕВА К ШЕЛЛИНГУ)」などが挙げられる。
10. 以降、引用中の括弧内外国語は引用先の文中で使用されている言語である。更に脚注訳が与えられている者については《》内に脚注のロシア語を付記する。
11. *Т.Л.Щепкиной-Куперник* Дорожные миниатюры // ЕЖЕМЕСЯЧНЫЕ ЛИТЕРАТУРНЫЕ ПРИЛОЖЕНИЯ К ЖУРНАЛУ "НИВА", 1899. Сен.-Дек., С.673-680.
12. Там же. С.673-680.
13. Там же. С.680-686.
14. *П.С-ский* Господин Бржестинский // Нива, 1878. №17. С.292.
15. *Е.А.Салиас* Соната Quasi una fantasia // Нива, 1895. №25. С.594.
16. *Н.А.д'Эссар* Девятая симфония // Нива, 1895. №44. С.1042-1043.
17. *В.Я.Светлов* Путь жизни // ЕЖЕМЕСЯЧНЫЕ ЛИТЕРАТУРНЫЕ ПРИЛОЖЕНИЯ К ЖУРНАЛУ "НИВА", 1899. Сен.-Дек., С.61.
18. *П.С-ский* Господин Брженский // Нива, 1878. №18. С.310.
19. 紙面では、さらに“Cap”に注釈をつけ、「“Cap”とは、キャプテンの省略語であり、会話の中で相手を呼びかける場合にしばしば使われる」と説明されている。

20. А.Гиллин Моя встреча с Эдиссоном // Нива, 1878. №48. С.889-891.
21. С.Еленский Андрей Пареный // ЕЖЕМЕСЯЧНЫЕ ЛИТЕРАТУРНЫЕ ПРИЛОЖЕНИЯ К ЖУРНАЛУ "НИВА", 1901. Май-Авг. С.617.
22. 刊行間もない 1870 年の『ニーヴァ』でも、すでにこの傾向が概ね出来上がっていた。
23. Е.Фортунато Два признания // Нива, 1918. №4. С.63.
24. 但し、あまりに平易なフランス語の呼びかけ (monsieur, madame) や挨拶 (Bonjour) には、脚注記がついていない場合もある。
25. Л.А.Чарская Без упрёка // Родина, 1905. №44. С.1390.
26. Суворовский музей-памятехранилище в С.-Петербурге // Родина, 1905. №13. С.403.
27. Н.Н.Никитский ДОМА и НА ВОЙНЕ // Родина, 1905. №20. С.622.
28. М.Ф.Караулов Последняя встреча // Родина, 1905. №31. С.971.
29. Вал.Я.Светлов КРУШЕНИЕ // Родина, 1905. №39. С.1244.
30. Р.Л.Антропов БОРЬБА // Родина, 1906. №17. С.268.
31. Г.Т.Северцев ВЕСЕННИЙ ЗАХВАТ // Родина, 1905. №19. С.599.『ロージナ』紙面では、脚注で更に、「≪「菩提樹の下」≫という意味で、ベルリンにある背の高い菩提樹が植えられた、華やかな直線の広小路あり、主要な通りの一つである」と語句説明が添えられている。
32. А.Ростовцев Старые липы шумят // Родина, 1905. №38. С.1197.
33. Н.Н.Никитский ДОМА и НА ВОЙНЕ // Родина, 1905. №19. С.586.
34. Г.Т.Северцев ВЕСЕННИЙ ЗАХВАТ // Родина, 1905. №34. С.1061.
35. А.И.Лавский В Колизее // Родина. 1907, №10. С.152.
36. 巽由樹子「ロシア帝国の公共図書館―「大改革」後ロシア社会における読者層拡大の検証―」北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センター スラヴ研究 №.55、2008 年。
37. В.Я.Светлов Безкрылые // ЕЖЕМЕСЯЧНЫЕ ЛИТЕРАТУРНЫЕ ПРИЛОЖЕНИЯ К ЖУРНАЛУ "НИВА", 1903. Май-Авг.
38. 引用 17 の В.Я.Светлов とは、一時期『ニーヴァ』の編集に携わっていた Валериан Яковлевич Светлов であると推測され、"Вал." と一致する。
39. Родина, 1905. №20. С.631.
40. Там же. С.632.
41. Родина, 1905. №37. С.1175.

参考文献

- 浦 雅春「メディアの興亡 - 十九世紀ロシアの文芸ジャーナリズム - 」『文学』4(2)、1993 年
- 貝澤 哉「革命前ロシアの民衆読書教育と国民意識形成 --1870 年代から 20 世紀初頭」『スラヴ・ユーラシア学の構築』研究報告集、2008 年
- 川端 香男里『ロシア文学史』東京大学出版会、1996 年
- 巽 由樹子「近世ロシア絵入り雑誌の研究：19 世紀後半における都市中間層の文化的側面の分析」東京大学 博士論文、2012 年

巽 由樹子「ロシア帝国の公共図書館 - 「大改革」後ロシア社会における読者層拡大の検証 -」北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センター スラヴ研究 No.55、2008 年

巽 由樹子「近代サンクトペテルブルクの出版人たち -1860 年代と 1870 年代の比較を通して -」東京大学大学院現代文芸論研究室論集 れにくさ 第二号、2010 年

土肥 恒之「ロシア・ロマノフ王朝の大地 (興亡の世界史)」講談社、2007 年

Jeffrey Brooks, “When Russia Learned to Read: Literacy and Popular Literature, 1861-1917,” Northwestern University Press, 2003.

Абрам Ильич Рейтблат “От Бовы к Бальмонту. Очерки по истории чтения в России во второй половине XIX века ” 2009.

Андрей Сергеевич Воронкевич “Русский иллюстрированный еженедельник в 1895-1904 гг. ” 1986.

“Illustrated Journals” in Late Nineteenth Century to Early Twentieth Century Russia; Differences in Footnotes between *Niva* and *Rodina*

OKUBO Kei

One of the characteristics of so-called “illustrated journals,” which were hugely popular in Russia between the late nineteenth and early twentieth centuries, was footnoted translations of European languages inserted into these works. This practice arose because the publishers aimed illustrated journals at the middle-brow readership that came about as a result of Alexander II’s education reforms. Yet, the existing research has roughly classified the required knowledge for readers of each illustrated journal. This paper compares *Niva* and *Rodina*, which were among the most prominent illustrated journals of all time, focusing on footnoted translations in their contents.

This examination revealed that *Niva* did not footnote French words, which were commonly known among the Russians of that time, while *Rodina* footnoted every foreign language. Hence, it can be concluded that *Niva* was aimed at readers who were more educated than those of *Rodina*, and this applied not only to those articles featuring foreign languages but also to the journal itself. Moreover, the readers of *Niva*, who once belonged to the large group of middle-brow readership, began to separate and form their own exclusive readership comprising a more thoroughly educated crowd. Eventually, journals that followed *Niva* such as *Rodina* began to create their unique readership and achieved commercial success. The stratification of the readership into various groups cannot easily be judged as right or wrong. However, the success of illustrated journals might have led the mildly stratified readership of that time into further stratification, which probably was the contributing factor that strengthened the gap between highly educated readers, including those of *Niva* and the others.